

# 習得しにくい漢語

—日本語の中で意味変化した語—

杉本 妙子  
(Taeko SUGIMOTO)

1. 日本語学習者にとって、中級、上級とレベルが上がっていくにしたがって問題となるものとして、漢語の習得が挙げられよう。とりわけ大学で学ぶ留学生にとって、論理的な文章理解のためにはかなり多くの漢語の習得が必須であり、問題は大きいと推測される。

日本語の学習過程において漢字および漢語は、初期の段階では中国語を母語とする学習者には、文字への親しみ・文章の内容理解という点でメリットがある。しかしながら、日本語の中の漢字は、日本語に取り入れられた後、中国語と直接の交渉（干渉）のない長い期間の中で、日本語に溶け込み、独自に変化したり独自の使い方が行われてきている。したがって、漢字あるいは漢語の表す意味は必ずしも現代中国語のそれと一致しない。例えば、文化庁の『中国語と対応する漢語』を見ると、日本語初級～中級レベルで学習される漢語1,883語のうち、約65%の1,216語は「日中両国語における意味が同じもの・きわめて近いもの」と分類されているが、「日中両国語における意味が著しく異なるもの」が68語（3.6%）、「日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの」が518語（27.5%）もある。また、中国語にはあるが日本語にはない漢語ということになると、おびただしい数にのぼるであろう。そこで、日本語の漢語習得の問題は、中国語を母語とする者にとっても軽視できない問題といえる。

そこで、ここでは日本語の漢語の中でも、日本語学習者が中級終了までの間に習得しておかなければならない語であり、日本語と中国語とで意味が大きく異なる語として類義語「関心、興味、趣味」を取り上げて、意味が異なるに至った背景を考察してみたい。

2. 現代日本語の「関心、興味、趣味」はどのような意味を持つ語であろうか。まず、辞書では、どのような語義説明がされているだろうか。代表的な国語辞典として、『新明解国語辞典〈第四版〉』および『大辞林』の記述を見てみよう（例文省略）。

『新明解国語辞典〈第四版〉』（1989.11）金田一京助他編、三省堂

- 関心 その事について（興味を持っていて）より深く知ろうとする気持を持つこと。  
興味 その物事について、おもしろいと思うこと。  
趣味 ㊦一定の習練を経た後、味わえる、そのものの持つおもしろみなど。  
㊧〔利益などを考えずに〕好きでしている物事。  
㊨〔選んだ物事や行動の傾向を通して知られる〕その人の好みの傾向。

『大辞林』（1988.11）松村明編，三省堂

- 関心 物事に興味をもったり，注意を払ったりすること。気にかけること。
- 興味 ①物事に心がひかれおもしろいと感じること。おもしろみ。おもむき。  
②〔教・心〕ある対象に対して特別の関心・注意を向ける心的傾向。
- 趣味 ①専門としてではなく，楽しみにすること。余技。ホビー。  
②物のもつ味わい。おもむき。情趣。  
③物の美しさ・おもしろみを鑑賞しうる能力。好み。感覚。センス。

『新明解国語辞典』も『大辞林』も現代語として最も一般的な語義・用例から記述するという編集方針であるが，両者の語義の掲げ方にはずれがある。また，「趣味」と「興味」は多義語の扱いがなされている。ここでは，日本語教育の立場から3語を考えていきたいので，現代語として最も一般的な語義・用法として，「趣味，興味」は『大辞林』の①に当たるものを中心に上げることとする。さて，ここで，筆者なりに3語の意味・用法を考えてみたい。

まず，現代日本語の「関心，興味，趣味」は，次の文のように同じ対象に対して用いることができる。

- (1) - a スポーツに関心がある。  
- b 数学に関心がる。  
- c カラオケに関心がある。
- (2) - a スポーツに興味がある。  
- b 数学に興味がる。  
- c カラオケに興味がある。
- (3) - a スポーツが趣味だ。  
- b 数学が趣味だ。  
- c カラオケが趣味だ。

このように3語は同じ対象に使い，その対象となるものの範囲は広いが，対象に対する感情・態度は違う（もちろん全て同じ対象に対して使えるというわけではない）。そこで上の文が成立する場合・条件を少し考えてみよう。(1) - cは，例えば，「心理学者が現代人の行動として」という場合うまく成立するが，「友人と余暇にしたいものとして」という場合，文は成立しても不自然な使い方と感じる。つまり，「関心」は楽しみとしての対象という意味は薄く，それに心がひかれ真面目に知りたいという知的欲求の対象の意味が強いといえる。一方「興味」の場合，(2) - cは「心理学者が現代人の行動として」という場合でも「友人と余暇にしたいものとして」という場合でも不自然でない。「興味本位，興味津津」などの用法があることから分かるように，「興味」は知的欲求の対象であるが，「関心」と比べると「面白そうだ」という感情が強くともなうといえる。そして「趣味」は，(3) - bが「クイズ感覚で問題を解くこと」といった場合でないと文が成立しないように，楽しみ・遊びとしての対象を表す，といえる。

なお，同じ対象に対して用いることができるといっても，「関心，興味」が文法的に同様の用法であり，対象に対してなんらかの行動をとともなっているといなくても使えるのに対して，「趣味」は文法的な用法が異なり，さらに対象に対してなんらかの行動がともなう場合にしか使えない，という

用法の違いがある。

- (4) - a 花子はオペラに関心／興味があり、よくコンサートに行っている。  
 - b 花子はオペラに関心／興味があるが、コンサートに行ったこともないし、レコードも持っていない。
- (5) - a 花子はオペラが趣味で、毎月コンサートに行っている。  
 \* - b 花子はオペラが趣味だが、コンサートに行ったこともないし、レコードも聴かない。

3. 現代日本語の「関心、興味、趣味」の意味をおおまかにとらえたところで、中国語との対応関係を見ておこう。

『中国語と対応する漢語』や『中日大辞典』（愛知大学編、大修館書店）で、日本語の「関心、興味、趣味」の現代中国語との対応関係を見ると、以下のようなものである。（なお、漢字は日本の通用のものを用いる。）

日本語	中国語
配慮・気にかける	関心
関心	興味・関心
興味	興味・興味・趣味
趣味	嗜好・興味・愛好
面白い	趣味

3語いずれも日中両国語の対応にかなりのずれが見られる。このずれは現代語におけるものなのだろうか。結果から述べると、近代以降、それも昭和になってから日本語において意味が変化したために、このようなずれが生じるに至ったようである。

日本語の「関心、興味、趣味」は、いずれも古辞書の類には見られない語で、古代から現代までの日本語を扱った『日本国語大辞典』（日本大辞典刊行会編、小学館）の記述・用例から推測すると、近代以降の語彙といえる（注）。そこで、近代以降のいくつかの辞書の記述を通して、3語の意味がいつ頃からどのように変化したかを見てみる。

4. 明治以来、義務教育・標準語の普及という政策と連動するように、それ以前とは比べものにならないくらい多くの国語辞典が発行されている。また、明治から今日までの急速な日本の変化はことばへも影響し、時代とともに変わっていく“現代語”を追うように新しい現代国語辞典が登場している。辞書の記述は、その時代の規範的なものを現すべく記述されているものであり、記述されることにより新しい語義や用法は市民権を得た、といえるだろう。もちろん、規範的であろうとするために、現実に使われていることばに遅れる形で記述されているという問題はある。しかしながら、明治以降の膨大な文献から実例を捜し出して並べていくのは実際には不可能に近く、またそれができたとしても文章語と口語との違いの問題が残る。したがって、ここでは編集当時の現代語を中心に扱った、主に国語辞典の記述を古い順から追うことにする。

以下、実際の記述を引用して見ていくが、引用に当たっては、(1) 旧字体・別字体の漢字は現代通用のものを用いる (2) 語義分類に用いられている記号は、①②…の記号を統一して使用する (3) 語義説明のための用例は省略する (4) 品詞・アクセント・発音・仮名づかい等の記述は省略する、

こととする。また、（ ）中に示した発行年月は、各辞書各版の1刷の年月である。

- I 『漢英対照いろは辞典』（1988.5 M.21）高橋五郎著，長尾景弼  
 関心 関心，管心，こころにかかる，こころにかくる To feel concerned.  
 興味 興味，おもしろみ，あちはひ Interesting quality, taste.  
 趣味 趣味，おもしろみ，おもむき，あちはひ Taste.
- II 『言泉』（1921.12～30.7 T.10～S.5）落合直文著，大倉書店  
 関心 心にかかりて，忘れられぬこと。きがかり。  
 興味 おもしろきあちはひ。おもしろみ。趣味。  
 趣味 ①人の感興を惹起すべきもの。おもしろみ。あちはひ。雅致。風韻。  
 ②『英 Taste』美を鑑賞する力。  
 ③ある物に対して，興味を感ずること。
- III 『辞苑』（1936.2 S.10）新村出編，博文館  
 関心 心にかかって忘れられぬこと。  
 興味 おもしろみ。趣。趣味。  
 趣味 ①感興をひき起こすべき状態。おもしろみ。あちはひ。おもむき。  
 ②或物に対して興味を感ずること。面白味。  
 ③（Taste）美的対象を鑑賞し批判する能力。
- IV 『明解国語辞典＜改定版＞』（1952.4 S.27）金田一京助編，三省堂  
 関心 心にかけること。  
 興味 おもしろみ。  
 趣味 ①あじわい。おもむき。  
 ②おもしろみ。  
 ③美しさ・おもしろみの分かる能力。
- V 『辞海』（1952.5 S.27）金田一京助編，三省堂  
 関心 心をひかれること。心にかかること。何物かがほしいとか，追及したいとか，おもしろいとか感じる—こと（心）。  
 興味 おもしろみ。  
 趣味 ①おもむき。あじわい。  
 ②このみ。嗜好。
- VI 『広辞苑＜第一版＞』（1955.5 S.30）新村出編，岩波書店  
 関心 ①〔王維の詩〕心にかかること。気がかり。懸念。  
 ②或認識対象に注意を集中することによって特徴づけられる態度。  
 興味 ①おもしろみ。おもむき。趣味。  
 ②〔心〕（interest）何らかの対象の内容に対する特別の注意を伴う感情。  
 趣味 ①感興をひき起こすべき状態。おもしろみ。あじわい。おもむき。  
 ②（taste）美的対象を鑑賞し批判する能力。

- VII 『広辞苑<第二版>』(1969.5 S.44) 新村出編, 岩波書店
- 関心 ① [王維の詩] 心にかかること。気がかり。興味をもって注意すること。懸念。  
② [心] (interest) 注意をむけて行動を一定の方向に導いてゆくこと。
- 興味 ① おもしろみ。おもむき。興趣。  
② [心] 関心の一種で、特にそのものに引きつけられる感情を伴うもの。
- 趣味 ① 感興をさそう状態。おもむき。  
② 美的な感覚のもち方。このみ。  
③ 専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄。
- VIII 『新明解国語辞典<第三版>』(1981.2 S.56) 金田一京助他編, 三省堂  
<前掲, 第四版の記述に一致, 省略>
- IX 『大辞林』(1988.11 S.63)  
<前掲, 省略>
- X 『デイリーコンサイス国語辞典』(1991.3 H.3) 佐竹秀雄他編, 三省堂
- 関心 興味。気がかり。
- 興味 心ひかれるおもしろみ。
- 趣味 ① 楽しみとして愛好する物事。  
② おもむきやおもしろみ(－を理解する力)。
- XI 『広辞苑<第四版>』(1991.11 H.3) 新村出編, 岩波書店
- 関心 ① [王維の詩] 心にかかること。気がかり。  
② 特定の事象に興味をもって注意を払うこと。或る対象に向けられている積極的・選択的な心構え, または感情。
- 興味 物事にひきつけられること。おもしろいと感ずること。心理学では関心の一種で、特にある対象やできごとに関心を向ける傾向。
- 趣味 ① 感興をさそう状態。おもむき。あじわい。  
② ものごとのあじわいを感じとる力。美的な感覚のもち方。このみ。  
③ 専門家としてでなく、楽しみとしてする事柄。

以上11種の辞書の記述を見ると、「関心、興味、趣味」の3語には、時代とともに次のような変化が現れていることが指摘できる。

- (1) 明治から昭和初期(戦前)までの「関心」は、「心にかかること、気がかり」という語義であり、これは中国語の「関心」の意味に非常に近いものである。それが、戦後間もなくの『辞海』の「関心」に初めて、「何物かがほしいとか、追及したいとか、おもしろいとか感じる－こと(心)」という現代語と同じ語義が現れる。そして、昭和後期には現代語と同じ語義が代表的な語義として位置付けられる。
- (2) 「興味」は、明治から戦後間もなくの昭和の中頃まで、「趣味」とほぼ同義の「おもしろみ、おもむき」(つまり「興」の意)であったが、昭和30年発行の『広辞苑<第一版>』に心理学用語としてではあるが現代語と同様の語義が現れる。そして、昭和後期の『新明解国語辞典<第三版>』以降、現代語と同じ語義が代表的な語義として位置付けられる。

(3) 「趣味」は、明治から昭和中期まで、英語のtasteに相当する語義として記述されている。そして、昭和後期の『広辞苑<第二版>』に「楽しみとしてする事柄」の記述が現れ、近年発行の『大辞林』において現代語の代表的な語義として位置付けられる。

3語に共通していることとして、いずれも現代語の代表的な語義が、戦前発行の辞書にその記述が見られず、戦後に現れて、一般的かつ代表的な語義として定着したものと見える。また、現代語の代表的な語義は日本語の「関心、興味、趣味」の元々のものではなく、西洋の語あるいは概念の訳語として使われたものが一般的な語義となったものようである（この点に関しては、資料不十分のため、断定はできない）。

以上のことから、「関心、興味、趣味」3語の意味が中国語のそれと一致する必然性はないのである。しかも、過去50年程の間に、日本語の中で新しい語義が生まれる形で変化してきている。したがってこのような漢語の場合、たとえ中国語母語の日本語学習者であっても習得しにくい漢語となる、といえる。

5. 日常使われていることばという点から見て、古く『万葉集』や『源氏物語』には稀にしか見られなかった漢語は、近松や西鶴を見てもさほど多くはない。それが近代・現代では漢語なしに日本語を使えないほど多用されている。漢語の日常一般的な使用は、近代以降のものといってもよいだろう。が、近代以降、日本の変化はあまりにも急激であった。その変化に歩調を合わせるべく、頻繁に使用されるようになった漢語の意味も急速に変化しているようである。その結果、現代、国際語のひとつになりつつある日本語は、同じ漢字という文字を使っても、現代中国語と随所で意味・用法にずれが生じ、中国語圏あるいは漢字圏の学習者にとっても習得を難しくしているといえる。このことは、日本語の歴史あるいは日本語教育という立場から、見過ごせないことであり、また、興味の尽きないことでもある。今後、より広い語について、より広く深く文献等に当たったり、中国語や朝鮮語との比較対照を行うなどして、その一端なりとも明かにしてみたい。

<注> 現代日本語の中の漢語は、近代の西洋文化の受容に際しては、翻訳語として使われたり造られたりし、飛躍的に多くのものが使用されるに至ったものである。「関心、興味、趣味」の3語もそのひとつといえるのかもしれない。